

詩 摘

野葡萄

秋元蘆風譯

東京日高有倫堂藏版

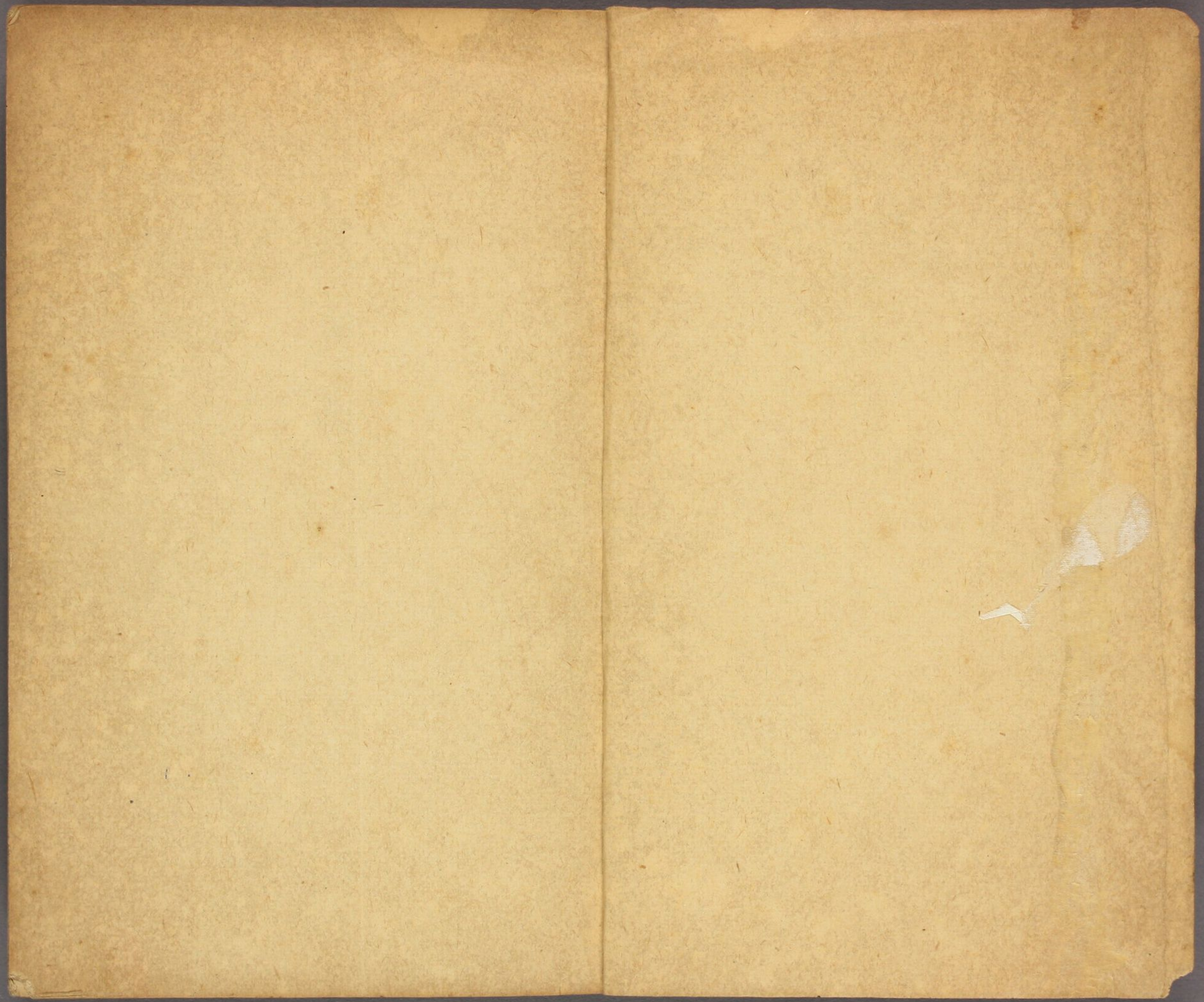


荀

汰元蘆風譯

50





野
葡
萄

秋
元
蘆
風

序

秋の日の詩野のかへき、
路の邊の草に交れる
野葡萄の蔓引き、葉分け
摘みためし實の幾房や。

庭園の棚もたわいに、
夕陽に種子さへ見ゆる
甘き實を人こそ愛づれ、
野のものに誰ふり向かむ。



日盛を森の小鹿は
谿河の水にこそ行け、
渴きたる人の心は
露甘き果實を慕ふ。

然ればなり、庭の果實に
童幼はあこがれ寄りむ、
野にみゆる美し果實の
何なれば、草に隠るゝ。

形まるき棚の葡萄は
童子の採るに任せむ、

草かげの優し果實を
房ながら、われは愛でなむ。

摘みためしこの幾房よ、
家づとと持てこそ來つれ、
園の實に飽きつる子等は
野のものに指をも觸れじ。

實は小さく、味は酸くとも、
悠和なる「自然」の花に
熟りし實の姿は清ら、
小さきが又愛らしき。

お、子等よ！野邊の果實に

珍らしき思のあらば、

鈴成すずなりの房の三つ四つ

試みに咬みても見ずや。

渴きたる胸癒いよさんには、

味しぶき果實このみも甘露あま——

手を觸れむ人は無くとも、

優しき實をば獨愛でなむ。

『野葡萄』の名をあさりて

此集に命じける其夜。

ゴエテ、シルレルの名は、久しく聞えき。従て、
其詩も多くの人に讀まれたり。ハイチに於ても、亦
然り。獨逸第一流の詩人として、人、素より彼等を
推すと雖、蔚然たる彼國の藝苑、豈啻に、此等、二
三の詩花のみと謂はんや。彼等と共に、詩の園を飾
る百花は、爛漫として、さなから春時の盛色を競へ
るに似たり。盛なりと謂ふべし。然れども、其名、
高きに集ふは、世の常習なり。櫻、梅、桃の名花は、
幸にして人の玩賞を買ふと雖、其名の、しかく高か
らざる他花に在つては、不幸にして、名花の盛名に
壓せらるゝの觀あり。豈、憾なきを得んや。

此書、分つて、『野葡萄』及『森蔭』の二編とな

す。

『野葡萄』收むる所、詩二十七篇、作家十餘人。即、彼國諸詩人の作品を、わが誦讀玩味するの傍、各、其優秀なるもの、可憐なるもの等、誦んで、多く、わが愛好賞嘆の念を惹きたるものを、嘗て邦韻に翻したるもの、名家の作、優秀は、即優秀なりと雖、吾人の耳朶に觸れて、さまで清新を競ふに足らじと、思惟せらるゝものなきに非ざるべし。されど、余は、原韻の、美はしく、又愛らしく、採て以て、詩人の風格を知るに足るものは、喜んで之を取りたりしなり。従て、此集に見るを得べきは、雅醇、清婉、艶麗、蕭洒たる抒情的作品にして、稍長篇に涉

れる叙事的作品、其他愛國詩篇等は、之を載せずと雖、之によりて、彼國抒情詩の大要を悟り、又、各詩人の風格を窺ふを得べく、獨逸近世の有名なる抒情詩人は、殆んど之によつて網羅せられたりと謂ふを得べきか、尙、卷末の評註をも参照せられん事を。若し、夫れ、ゲーテ、ハイネの諸篇に至ては、既に、先輩の才筆に依て、其幾篇は翻譯せられつ、讀者は、之によつて、幾多の利益を味ひたりしや疑なからん。而して、シルレルの長篇に至ては、譯者、後進、禿筆を呵して、別に、其幾種を邦韻に摸したるを以て、近く、讀者の一瞥を煩し、遍く識者の高教を乞はんと欲す。請ふ、之を恕せよ。

前の小著『紛紅集』は、著書が拙き筆才と淺き學識とを以て作爲したる、彼國諸詩人の短篇譯詩、凡六十首を集めたるものなりしが、今、此書に集むる所は、其後の作にして、其大方は、嘗て、二三の雜誌にて公にしたるものなれども、茲に收むるに當て、或は修訂を施し、或は全然改作したるものなきに非ず、之を前者の後集と見るを得べしと雖、詩篇の撰擇及翻譯の用意等に至ては、多少、前者と趣を異にするものあるを信ず。

翻譯の結果に對しては、譯者、到底、其完全を希ふ能はずと雖、原詩の風韻音調、形式句法を摸せん事に就ては、多少の考慮と勞力とを費したりし事を、

茲に告白す。譯詩にして、幸に、原詩の風韻幾何を傳ふることを得ば、以て、わが勞を慰むるを得ん。集中、僅に一二篇を除くの外は、それら並行譯を用ゐ、成るべく原句に忠實ならんを期したりと雖、拘束多き詩句の翻譯、假令、簡單なるものに在ても、到底多少の犠牲を免れず、此等は即意譯に由れり。尙、句々の精細に涉ては、讀者の教を待て、後、修正を施す所あらんとす。

紙面の體裁を顧みず、之に原詩を添へたるは、一は以て、讀者が對照に便し、一は以て、自から愛好の詩歌に親まんが爲なり。

『森蔭』收むる所、多少の創作なきに非すと雖、

未だ、之を以て自家の集となすに非ず。概ね、獨詩の反影と見るべき可憐の小品なるを以て、之に加へたる迄なり。

今、再、斯かる小冊子を編み終へて、彼國もろくの詩人を偲び、併せて、わが、いさゝかの勞苦を顧みれば、座邊の小さき書架に列座せる、諸詩人が幾種の集は、さながら、われを見やつて、微笑を漏らせるに似たり。以て、卷頭に書す。

明治三十八年十一月

蘆

風

目次

野葡萄

柑子の花に寄する歌	三
夕の歌	九
石楠花賦	一七
海の胡蝶	二一
彼女の墓	二九
二つの胸のわかるゝ時	三三
行遊小吟	三九
小舟	四一
碎けし指輪	四七

歸郷	五
牧童と獵夫	五三
その日その日	六一
涙の慰籍	六三
園女と蜜蜂	六九
南を思ふ	七三
夕の平和	七九
ヘクトール <small>の</small> わかれ	八一
紅雀	九一
運命	九九
小羊	一〇五
愛の祭	一一一

あこがれ	一一五
銀泉	一二三
夜の聲	一二七
伶人が漂泊の歌	一三一
夕のねがひ	一三五
森の慰籍	一三七

森 蔭

さまよひ人の歌	一四五
行くはいづこ	一五二
歌の息子	一五四
夜の侶	一五八

野
葡
萄

かたれ小鳥	一六三
愛鍵	一六六
薔薇初花	一六八
どこへ行く	一七二
まひるの甘夢	一七六
野の思	一七八
鳥のわかれ	一八一
うた人去りぬ	一八四
沙漠の果實	一八六
月見草	一八八

註

(目次終)

野
葡
萄

柑子の花に寄する歌

あな、あはれ、南土の花よ、
寒き郷に、何のおもひで？
我も亦、異郷のさすらひ、
胸に満つ、懊惱、憧憬。

秋
元
蘆
風
譯

FELDTRAUBEN.

AN EINE ORANGENBLÜTE.

Was willst du in den kalten Zonen,
O Blume, du aus Süden kam?
Auch ich muss in der Fremde wohnen
Voll Sehnsucht und voll Gram.

嘆きつゝ、病室のおきふし、
 わづらひの吾等が運命、
 郷神の美しき恩恵、
 此處にして誰かは愛でむ？
 優しかる香をな放ちそ、
 芳ばしき花托を閉ぢよ、
 貴かる汝が生命、
 徒に異郷に捨つな。
 晴和なる虚空の下に
 小歌のかず湧きいでし、

Und beider nur ein kläglich Leben,
 Im Krankenhause, leben wir ;
 Was uns der Heimat Götter geben,
 Wer nützt und liebt es hier ?

Verschliesse deine zarten Düfte,
 Den Kelch von Wohlgerüchen schwer,
 Und ströme nicht in Totengräfte
 Des höchsten Lebens Meer.

Auch sie, der unter milderm Himmel
 Wol manches kleine Lied entquoll,

堅琴の妙音も何方、
戦の世や騒がしき。

暖かき日の照るところ、
其處に、汝、復も芳はむ。

静かさの領するところ、
其處に、我、更に歌はむ。

痛ましき感情に悩み

萎るとも、斃れ果つとも、
己みがたき胸の希望を

あゝ、我等、遂げで罷まんや。
—シエンケンドルフ。

Die Harfe schweigt im Kriegsgetümmel,
Sie klang so minnevoll.

Dort magst du wieder dich entfalten,
Wo deine warme Heimat blüht ;
Dort, wo die stillen Zauber walten,
Sing ich ein neues Lied.

Und können wir es nicht erwerben,
Der höchsten Sehnsucht höchstes Ziel,
So lass uns welken, lass uns sterben
In schmerzlichem Gefühl.

—Schenkendorff.

天 暮 平 虚 森 黄 獨 日
 地 鐘 和 空 掩 金 獨 日
 静 鐘 和 空 ふ 綾 わ 影
 け 響 を の 状 織 れ 西
 く 諸 降 ら は に る 立 西
 な 共 す、 黄 憧 夕 映 の 沈
 り に 地 昏 の ぬ の 山 沈
 に の の の の の の 山 沈
 け 上 の の の の の の 山 沈
 り。 上 の の の の の の 山 沈

夕の歌

ABENDLIED.

Ich stand auf Berges Halde,
 Als heim die Sonne ging,
 Und sah, wie überm Walde
 Und Abends Goldnetz hing.

Des Himmels Wolken tauten
 Der Erde Frieden zu,
 Bei Abendglockenlauten
 Ging die Natur zu Ruh !

Ich sprach : O Herz, empfinde
Der Schöpfung Stille nun,
Und schick' mit jedem Kinde
Der Flur dich auch, zu ruhn.

Die Blumen alle schliessen
Die Augen allgemach,
Und alle Wellen fliesen
Besänftigt im Bach.

Nun hat der müde Sylphe
Sich unters Blat gesetzt,

吾^{われ} うちいでぬ — 胸よ、今
萬^よ 有^り の 静^{せい} 寂^{じやく} を 覺^さ れ かし。
兒^こ 等^ら 共^{とも} 共^ぐ に、 憩^{やす} ふ べ く
汝^{なれ} も 往^ゆ か ず や、 野^の の ほ どり。

夕^{ゆふ} さ り く れ ば、 や う く に
眼^{まなこ} を 閉^し ざ す、 野^の 邊^へ の 花^{はな}。
波^{なみ} の 躍^{おど} 動^り は 收^と ま り て、
い さ、 小^こ 川^{がわ} の 音^ね し づ か。

勞^{あつ} れ し 身^み を ぞ 息^{いき} め ん と、
葉^は 蔭^{かげ} に 寄^よ る や、 風^{かぜ} の 精^{せい}。

臥 <small>ふし</small> 所 <small>ど</small> を 探 <small>たづ</small> る、 小 <small>こ</small> 牡 <small>ま</small> 鹿 <small>か</small> や。	繁 <small>ひ</small> れる 森 <small>ま</small> の 谿 <small>たに</small> が く れ	空 <small>そら</small> よ り く だ る、 夕 <small>ゆふ</small> 雲 <small>ぐも</small> 雀 <small>すずめ</small> 。	草 <small>くさ</small> 野 <small>の</small> の ね ぐ ら 定 <small>さだ</small> む べ く	寢 <small>ね</small> 舎 <small>や</small> を ば 索 <small>もと</small> む、 羊 <small>ひつね</small> の 群 <small>ぐん</small> 。	牧 <small>まき</small> の わ ら ん べ 諸 <small>しよ</small> 共 <small>ども</small> に	そ れ、 さ な が ら に 搖 <small>ゆ</small> 籃 <small>らん</small> か。	黄 <small>こ</small> 金 <small>ね</small> 蟲 <small>むし</small> 寄 <small>よ</small> る 薔 <small>ば</small> 薇 <small>ら</small> の 葉 <small>は</small> は	蘆 <small>あし</small> か げ 眼 <small>ま</small> る、 草 <small>くさ</small> 蜻 <small>か</small> 蛉 <small>らう</small> 。	翅 <small>はね</small> 夕 <small>ゆふ</small> 露 <small>つゆ</small> に う る ほ ひ て
---	---	---	---	---	---	---	--	---	---

Und die Libell' am Schilfe
Entschlummert taubenetzt.

Es ward dem golden Käfer
Zur Wieg' ein Rosenblatt ;
Die Herde mit dem Schäfer
Sucht ihre Lagerstatt.

Die Lerche sucht aus Lüften
Ihr feuchtes Nest im Klee,
Und in des Waldes Schlüften
Ihr Lager Hirsch und Reh'.

Wer sein ein Hüttchen nennet,
Ruht nun darin sich aus ;
Und wen die Fremde trennet,
Den trägt ein Traum nach Haus.

Mich fasset ein Verlangen,
Dass ich zu dieser Frist
Hinauf nicht kann gelangen,
Wo meine Heimat ist.

—Rückert.

家てふものを持つてる身は
今こそ憩へ、そが中なかに。
他國よそに在る身の、はかなさは
夢に我家を偲ぶとも。
あゝ、あゝ、故郷ふるさとを離れ來て
我家遠く隔てゝは、
遙けき方を偲びつゝ、
夕、思の盡きぬ哉。

—リユッケルト。

宛然	巖陰	汝が	春風	實に	咲く	氷の	高嶺
		嫩葉	ぬる	寂寞	か石楠花	に、雪降る	の彼方
空なる	咲く	に觸れん	天吹くとも	の詩にこそあれ。	寂しき	中に、	緑苔蒸すところ、
笑と見んか。	寂しき態は	ともせず。			状態は		

石楠花賦

DIE ALPENROSE.

Hoch auf dem Berg, im braunen Moose,
 Von Eis umglänzt und halb verschneit,
 Blüht still empor die Alpenrose ;
 Ein süß Gedicht der Einsamkeit.

Der lauen Frühlingslüfte Fächeln
 Küsst ihre jungen Blätter nicht ;
 Sie steht wie ein verloren Lächeln
 Im starren Felsenangesicht.

Die kalten Gletscherwände steigen,
Anthürmend mächtig Stück für Stück
Und unbemerkt im ewgen
Wächst sie, wie ein verschwiegen Glück

O selig der, dem wohlgeborgen,
Im oft durchfrosteten Gemüth,
Hoch über allen Lebenssorgen,
So eine süsse Lume blüht !

—Löwe.

塊^{くわい} 又 塊^{くわい} と 厚^{あつ} う な り ゆ く
冷^{ひや} た さ 氷^{こほり} の 絶^{つた} 壁^{かべ} が く れ、
人^{ひと} に 識^し ら れ ぬ 可^い 憐^{れん} 姿^{すがた}
是^{こゝろ} れ や、 秘^{ひそ} め る 幸^{さい} と 言^い は じ む。

情^{なさけ} 冷^{ひや} え た る 人^{ひと} の 世^よ 離^り れ、
隱^{かく} れ て 住^す ぶ は 幸^{さい} な ら ず や、
塵^{ちん} 世^よ の 煩^{わづら} ん 累^{かさね} 遠^{とほ} く 隔^{へだ} て、
優^{やさ} し き 花^{はな} の 嶺^{みね} に 咲^さ く な る。

ロ
エ
ー
ワ
エ
○

DER SCHMETTERLING.

Es irrt durch schwanke Wasserhügel
Im weiten, windbewegten Meer
Ein Schmetterling mit mattem Flügel
Und todesängstlich hin und her.

Ihn trieb's vom trauten Blütenstrande
Zur Meeresfremde fern hinaus ;
Vom scherzend holden Frühlingstande
In's ernste, kalte Fluthgebraus.

海
の
湖
蝶

風に揺らめく海原、
山なす濤を打越えて、
彼方、此方に行きなづむ
胡蝶が翅は疲れたり。

花咲く岸を振り棄て、
海の彼方へ往かばやと、
楽しい春の郷離れ
冷たき潮に交りけり。

和^なぎ渡^{わた}りたる濤^{うしほ}の面^{おもて}、
 風^{かぜ}も軟^ならかに、花^{はな}清^{きよ}く
 尙^{なほ}美^{うつく}はしき牧^{まき}ありと、
 鏡^{かがみ}の面^{おもて}は欺^{あざむ}きぬ。
 風^{かぜ}のさゝやき、花^{はな}のゑみ、
 岸^{きし}なる郷^{さと}に飽^あき足^{たり}らで、
 胡^こ蝶^{てつ}、慾^{のぞ}望^みに得^え堪^たへねば
 遠^{とほ}く往^ゆかんと企^{こころ}てつ。
 心^{こころ}急^{いそ}げれる春^{はる}の兒^こが
 岸^{きし}を離^{はな}るゝ節^{ふし}こそあれ、

Auf glattgestreckte, sanfte Wogen
 Hatt' ihm das Meergras trügerisch
 Viel schön're Wiesen hingelogen,
 Wie westgeschaukelt, blumenfrisch.

Ihm war am Strand das leise Flüstern
 Von West und Blüthe nicht genug,
 Es trieb hinaus ihn, wählig lüstern,
 Zu wagen einen weitem Flug.

Kaum aber war vom Strande geflogen
 Des Frühlings ungeduld'ges Kind,

憂	海	波	胡	空	樂	岸	風	魔	颯
の	を	の	蝶	し	し	を	の	風	と
笑	越	獲	は	や	き	離	ま	は	後
を	え	物	か	岸	故	る	に	彼	ろ
湛	ゆ	と	な	に	郷	弱	ま	を	に
へ	く	滅	く	急	を	き	に	誘	吹
た	旅	ぶ	海	れ	忍	身	い	ひ	き
り	人	る	の	ど	び	は	や	け	起
。	は	に		も	つ	は	遠	り	る
					、	は	く	。	

Kam sausend hinter ihm gezogen
Und riss ihn fort der böse Wind ;

Stets weiter fort von seines Lebens
Zu früh verlornem Heimathglück ;
Der schwache Flattrer ringt vergebens
Nach dem verschmähten Strand zurück.

Von ihrem Schiffe Wandersleute
Mit wehmuthsvollem Lächeln sehn
Die zierlich leichte Wellenbeute,
Den armen Schmetterling vergehn.

O Faust, o Faust, du Mann des Fluches!
Der arme Schmetterling bist du!
Inmitten Sturms und Wogenbruches
Wankst du dem Untergange zu.

Du wagtest, eh der God dich glüsste,
Vorflatternd dich in's Geistermeer;
Und gehst verloren in der Wüste,
Von wannen keine Wiederkehr.

Wohl schauen dich die Geisterschaaren,
Erbarmen lächelnd deinem Leid;

あゝ、ファウストよ、呪咀の人！
汝、憐れの蝶の身か！
波風あらしき海の中
真中に汝は滅びゆく。

死をば冒して健氣にも
精靈の海に漕ぎ出でつ、
荒野の露と消ゆる身は
あゝ、復、いつか歸るらむ？！

魔群、悩める汝を想ひやり、
ほゝえみ見やるども、

Doch müssen sie vorüberfahren,
Fortsteuerend durch die Ewigkeit.

—Lenau.

IHR GRAB.

Es blüht ein Grab in treuer Hut,
Das beste Herz darinnenruht.
Zu oberst blühen Rosen rot—
Dein Mund so manchen Kuss mir bot.

久遠の海に掉して
妾は遂に消えんのみ。

——レーナウ。

彼女の墓

墳墓の花の盛や、
愛人いこふ苔の下蔭。

頂上に匂ふ紅薔薇——
接吻のそれや幾たび。

我 丘
胸 の 邊
は を
碎 人
く こ
る そ
ば 過
か り。 ぎれ、

—
グ
ル
ァ
イ
フ。
—

春 脚
遊 下
あそび した
に
思 緑
ひ の
ぞ 花
出 園
づ ー
る。

汝 稍
が 下
胸 邊
は 咲
清 く
く や
ぞ 白
燃 百
る し。 合
—

Und weiter ab die Lilie blüht—
Dein Herz hat rein für mich geglüht.
Zu Füßen liegt ein grüner Kranz—
Ich schwang dich oft im Maientanz.
Die Leute gehen d'ran vorbei,
Mir aber bricht das Herz entzwei.
—Greif.

互^{かたみ}に慕へる
 二つの胸のわかるゝ時、
 『さらば、さらば、いと悲しげに
 響く言の葉、いと悲しげに
 烈しきなやみ、いと悲しげに
 勝るもの無き
 二つの胸のわかるゝ時、
 互^{かたみ}に慕へる
 二つの胸のわかるゝ時、
 一

WENN SICH ZWEI HERZEN SCHEIDEN.

I.

Wenn sich zwei Herzen scheiden,
 Das ist ein grosses Leiden,
 Wie's gröss'eres nimmer giebt.
 Es klingt das Wort so traurig gar :
 Fahr' wohl, fahr' wohl auf immerdar!
 Wenn sich zwei Herzen scheiden,
 Die sich dereinst geliebt.

戀破れんと
 始めて吾の
 さとれる時。

『さらば、さらば、
 とこしへ』と、

耳に入りける
 聲奇しげに

消えけん思ひ。

照れる日影の

始めて吾の
 さとれる時、

戀破れんと

二

Als ich zuerst empfunden,
 Dass Liebe brechen mag;
 Mir war's, als sei verschwunden
 Die Sonn' am hellen Tag.
 Mir klang's im Ohre wunderbar:
 Fahr' wohl, fahr' wohl auf immerdar!
 Da ich zuerst empfunden,
 Dass Liebe brechen mag.

何^な故^どかは知^しれり、
 何^な故^どかは知^しれり、
 吾^わ生^よの春^はの光^は消^えぬ。
 『さらば、さらば、どこしへ』と、
 其^こ言^ご葉^は、唯^た、彼^き女^み、あざやかに
 口^{くち}冷^やえ黙^もす。
 吾^わを口^{くち}接^つけし
 吾^わ生^よの春^はの光^は消^えつ。
 何^な故^どかは知^しれり、

三

—ガイベル。

3.

Mein Frühling ging zur Rüste,
 Ich weiss es wohl, warum ;
 Die Lippe, die mich küsste,
 Ist worden kühl und stumm.
 Das eine Wort nur sprach sie klar :
 Fahr' wohl fahr' wohl auf immerdar!
 Mein Frühling ging zur Rüste,
 Ich weiss es whol, warum.

—Geibel.

谿間の床を離れかね
 眠氣の夜は地を匍ふに、
 胸を焦がして朝の日に
 雄々しく向ふ、告天子。
 何を、人の子、遅々として
 汝は床を去り得ぬか？
 小さな懊惱に何なやむ？
 床をば蹴つて起つべきぞ！

—アイヒェンドルフ。

行遊小吟

WANDERSPRUCH.

Die Lerche grüsst den ersten Strahl,
 Dass er die Brust ihr zünde,
 Wenn träge Nacht noch überall
 Durchschleicht die tiefen Gründe.

Und du willst, Menschenkind, der Zeit
 Verzagend unterliegen?
 Was ist dein kleines Erdenleid?
 Du musst es überfliegen!

—Eichendorf,

響は對ふ、雙の岸。
 角笛の音は、
 今、取りいでしものや何？
 獵夫、褐の毛衣より
 今こそ黙せ、舟の中。
 互に識らぬ仲なれば、
 小舟、静かに下りゆく。
 船軌、曳ひて大河を

小舟

DAS SCHIFFLEIN.

Ein Schifflein ziehet leise
 Den Strom hin seine Gleise ;
 Es schweigen, die drin wandern
 Denn keiner kennt den andern.

Was zieht hier aus dem Felle
 Der braune Weidgeselle ?
 Ein Horn, das sanft erschallet ;
 Das Ufer wiederhallet.

Von seinem Wanderstabe
Schraubt jener Stift und Habe
Und mischt mit Flötentönen
Sich in des Hornes Dröhnen.

Das Mädchen sass so blöde,
Als fehlt' ihr gar die Rede;
Jetzt stimmt sie mit Gesange
Zu Horn und Flötenklange.

Die Rudrer auch sich regen
Mit taktgemässen Schlägen;

側の一人——旅の者

杖の荷物の紐解くや、

吹く笛の音は 嚙喰と、
響動に和しぬ、角笛の。

語らふ友もあらなくに、

恥ぢてやありし、女子は
角と笛との音に添へて

今、歌ぶしを合せけり。

舟 行く者も勇み立ち、
櫂打つ音も ハタ〜と、

Das Schiff hinunterflieget,
Von Melodie gewieget.

Hart stösst es auf am Strande,
Man trennt sich in die Lande :
„ Wann treffen wir uns, Bruder,
Auf einem Schiffein wieder ? ”

—Uhland.

曲しらべ調べにつれて揺ゆられつゝ、
舟は下りぬ、飛ぶが如。

いつしか岸に着きぬれば、
別れわかれに人は行く。
『あゝ、同胞どうぼうよ！いつかまた
同じ小舟の人たらむ？』

—ウーランド。

指輪二つに碎けけり。
 されど、誓約の破られつ、
 君は賜びにき、指の輪を。
 誠ちぎりし其をりに
 姿は、いつか消え失せぬ。
 そここに住まひし吾愛人の
 廻る磨舎の水車、
 谿間すゞしき河ぞひに

碎けし指輪

DAS ZERBROCHNE RINGLEIN.

In einem kühlen Grunde
 Da geht ein Mühlenrad,
 Mein' Liebste ist verschwunden,
 Die dort gewohnt hat.

Sie hat mir Treu versprochen,
 Gab mir ein'n Ring dabai,
 Sie hat die Treu gebrochen:
 Mein Ringlein sprang entzwei.

Ich möcht' als Spielmann reisen
Weit in die Welt hinaus
Und singen meine Weisen
Und geh'n von Haus zu Haus.

Ich möcht' als Reiter fliegen
Wohl in die blut'ge Schlacht,
Um stille Feuer liegen
Im Feld bei dunkler Nacht.

Hör' ich das Mühlrad gehen:
Ich weiss nicht, was ich will—

あゝ、
我や往かまし、
門より門に訪づれて
我や歌はん、
吾曲を。

あゝ、
我や往かまし、
竊火のほこり密やかに、
我や忍ばん、
闇の夜を。

廻る水車の音聞けば、
麻こやみだる、
わが心

Ich möcht' am liebsten sterben ;
Dann wär's auf einmal still.

—Eichendorf.

HEIMKEHR.

O, brich nicht, Steg ! du zitterst sehr.
O, stürz nicht, Fels ! du dräuest schwer.
Welt, geh nicht unter, Himmel, fall nicht ein,
Eh' ich mag bei der Liebsten sein !

—Uhland.

生^{いのち}命^{めい}あらぬが 寧ろ幸^{さいち}。
死^しなば 心のしづまらむ。

—アイロエンドルフ。

歸

郷

震^{こみち}ふ 徑^{みち}よ、くづるゝな！
躍^{いはは}る 巖^{いわ}よ、くだくるな！
天^{てん}よ、落ちざれ、地^ちよ、ちぢざれ、
君^{きみ}のかたへに至るまで。

—ウーランド。

* HIRT UND JÄGER.

1 Hirt.

Wen sich der Sommermorgen still erhebt,
Kein Wölkchen in den blauen Lüften schwebt,
Mit Wonneschauern naht das Licht der Welt,
Dass sich die Ährenfelder leise neigen,
Da sink' ich auf die Knie im stillen Feld
Und bete, wenn noch alle Stimmen schweigen.

牧童と獵夫

— 牧童

夏の夜、静かに明け離るれば、
蒼天、一朵の雲を止めず。
日の影、楽しく世に近づけば、
静かに首垂る、野邊の麥穂。
寂たる野外の草に坐して
祈禱舉ぐるは、われ、牧童。

河邊、日の影疲れてまどろむ白晝、
樹蔭に身を息むれば、

三 牧童

明るき虚空に驚ぞ翔ける。
樹間を漏るゝ日、谿間を射れば、

起りぞ始むる獵夫が快樂、

君等が呼吸の終れる頃を
獵夫に非すば、誰かは吸はむ。

二 獵夫

緑の谿間流るゝ風を

2 Jäger.

Doch keiner atmet so den Strom von Lüften,
Als wie der Jäger in den grünen Klüften!
Wo euch der Atem schweigend schon vergangen,
Hat seine rechte Lust erst angefangen,
Wenn tief das Thal auffunkelt durch die Läume,
Der Aar sich aufschwingt in die klaren Räume.

3 Hirt.

Und sinkt der Mittag müde auf die Matten,
Rast' ich an Bächlein in dem kühlestn Schatten,

樹々の梢のさゝやき密か、
 流は夢境につぶやく如く、
 此身は虚空の雲と共に
 底ひも知られぬ海を航くよ
 四 獵 夫
 日の影、谿間にまどろむ頃を
 吾身は泰然、尾上に立ちて
 雲霧立つ地平を遠く眺め、
 胸をぞ湧き出る樂しき歌は、
 静かにうなづく梢を傳ひ、
 虚空の彼方に遠く響く。

Ein leises Flüstern geht in allen Bäumen,
 Das Bächlein plaudert wirre wie in Träumen, *
 Und mit den Wolken in den stillen Räumen
 Schiff' ich still fort zur unbekanntem Tiefe.

4 Jäger.

Und wenn die Tiefe schwül und träumend ruht,
 Steh' ich am Berg' wie auf des Landes Hut,
 Seh' fern am Horizont die Wetter steigen,
 Und durch die Wipfel, die sich leise neigen,
 Rauscht droben schwellend ein gewaltig Lied,
 Das ewig frisch mir die Seele zieht.

日はたそがれて、蟲鳴き出で、
 風に揺らるゝ花の樹蔭、
 少女、窓邊に語るころを、
 巖も響かせ、胸にも泌ませ、
 吹く風ぬるき夏の夜ごろ、
 啾唳、吾吹く笛や樂し。

六 獵夫

夜の幕、谿間を鎖ざすとても、
 山より見やるは、夕陽の光。

五 牧童

5 Hirt.

Es blitzt von fern, die Heimchen bringen,
 Und unter Blüten, die im Wind sich rühren,
 Die Mädchen plaudernd sitzen vor den Thüren;
 Da lass ich meine Flöte drein erklingen,
 Dass ringsum durch die laue Sommernacht
 In Fels und Brust der Wiederhall erwacht.

6 Jäger.

Doch wenn die Thäler unten längst schon dunkeln,
 Seh' ich vom Berge noch die Sonne funkeln,

Der Adler stürzt sich jauchzend in die Gluten,
Es bricht der Strom mit feuertrunknen Fluten
Durchs enge Steingeklüft, wie er sich rette
Zum ew'gen Meer—ach, wer da Flügel hätte ! *

—Eichendorf.

WERKTAG.

Wir wandern nun schon viel hundert Jahr,
Und kommen doch nicht zur Stelle—
Der Strom wohl rauscht an die tauseud gar
Und kommt doch nicht zur Quelle.

—Eichendorf.

火の焔に衝き入る鷲の雄々しさ。
黄金と砕くる波吹き散らし、
巖間を廻らふ谿間の流。
翹ある者をば誰となすや？

—アイロエンドルフ。

その日その日

世に幾歳をさまよひて、
吾等が路は盡くるらむ。
幾歳地を往きゆきて、
流は源にかへるらむ。

—アイロエンドルフ。

喜^よ悦^び充^みつる此^こごろを、
 何^{なに}にうれひの君^{きみ}ならむ。
 君^{きみ}が眼^{まなこ}を打^う見^みれば、
 涙^{なみだ}の痕^{あと}ぞしのばるゝ。
 胸^{むね}のいたみに得^え堪^かへねば、
 吾^{われ}は涙^{なみだ}に暮^くれしなり。
 涙^{なみだ}のかぎり泣^なきてこそ、
 胸^{むね}は和^やらぐ心地^{こころち}すれ。

涙の慰籍

TROST IN THRÄNEN.

Wie kommt's, dass du so traurig bist,
 Da alles froh erscheint?
 Man sieht dir's an den Augen an,
 Gewiss, du hast geweint.

"Und hab' ich einsam auch geweint,
 So ist's mein eigener Schmerz,
 Und Thränen fließen gar so süß,
 Erleichtern mir das Herz."

Die frohen Freunde laden dich :
O, komm an unsre Brust !
Und was du auch verloren hast,
Vertraue den Verlust.

„Ihr lärmt und rauscht und ahnet nicht,
Was mich, den Armen gequält.
Ach nein verloren hab' ich's nicht,
So sehr es mir auch fehlt.“

So raffe denn dich eilig auf !
Du bist ein junges Blut.

友 ほゝゑみて君待つに、
來りて友が胸に頼れ。
失へるもの、そも何ぞ？
心の底を語らずや。

喜びくるふ吾友よ！
君は知らじよ、吾なやみ。
叶はぬ戀のありといへど、
失へるにはあらずかし。

然ば、われ、君を勵まさむ、
胸の血あつき若人よ、

強き力を持てる身ぞ！
 勇みて目的に進む身ぞ！
 希願 叶はぬ我身ぞや！
 餘りに遠きそれなれば、
 清き光に輝ける、
 高き虚空の星に似て。
 高き虚空の星なれば、
 光のみこそ人慕へ。
 あくがれごとち、夜な夜なの
 清き影こそ人仰け。

In deinen Jahren hat man Kraft
 Und zum Erwerben Muth.
 „Ach nein, erwerben kann ich's nicht,
 Es steht mir gar zu fern ;
 Es weilt so hoch, es blinkt so schön,
 Wie droben jener Stern.“
 Die Sterne, die begehrt man nicht,
 Man freut sich ihrer pracht,
 Und mit Entzücken blicket man auf
 In jeder heitern Nacht.

„Und mit Entzücken blick' ich auf
So manchen lieben Tag ;
Verweinen lasst die Nächte mich,
So lang' ich weinen mag.”

—Goethe.

DIE GÄRTNERIN UND DIE BIENE.

Eine kleine Biene flog
Emsig hin und her und sog
Süssigkeit aus allen Blumen.

あくがれごち、幾日かを
虚空戀しく眺むらむ。
せめては、幾夜をなぐさめに
涙のかぎり泣かしめよ。
ゴエーテ。

園女と蜜蜂

小さなる 蜜蜂。
花より花を訪づれて
甘き露を吸い居たり。

Bienchen, spricht die Gärtnerin,
Die sie bei der Arbeit trifft,
Manche Blume hat doch Gift,
Und du saugst aus allen Blumen?

Ja, sagt sie zur Gärtnerin,
Ja, das Gift lass ich darin!

—Gleim.

園を つちかふ 少女、
蜂にむかひ言ひけらく、
「花には毒のひそめるに、
君は花をぞ吸ひありく」

『さなり、少女よ！そが中に
毒を残して行くはわれなり』。

— グライム。

其 ほ ど り	其 め ぐ り	麗 は し く、	遙 な る 郷	南 を、	雷 の 遠 鳴 る 彼 方	風 の 音 も 南 に す る か、	南 へ 雨 は 行 く な り、	南 を 思 ふ
瑞 風 吹 き か を る。	森 の 樹 さ わ ぎ、	懷 か し 小 村、	ウ ン ガ ル の					

NACH SÜDEN.

Dort nach Süden zieht der Regen,
 Winde brausen südenwärts,
 Nach des Donners fernen Schlägen,
 Dort nach Süden will mein Herz.

Dort im fernen Ungarlande
 Freundlich schmuck ein Dörfchen steht,
 Rings umrauscht von Waldesraume,
 Mild von Segen rings umweht.

静のど穩かなる小村のはづれ、
 寂しくも立てる小こ家いや、
 廣からぬ住居すまひの中うちに
 吾が戀ふる君こそ待てれ。
 森わかかれ聳ゆる樹々は
 君が家を慕ひやすらむ、
 親しげに枝さし延べて
 壁を掩ひ、家根をぞ纏まとふ。
 戀に倚る少女せうじよリラーは
 黙然もくねんと森うち見やり、

An des Dörfchens stillem Saume
 Ist ein Hüttlein hingestellt,
 Das in einem schmalen Raume
 Wahret meine Herzenswelt.

Bäume, die dem Wald entsprungen,
 Sehnd nach dem Hüttlein sich,
 Halten Dach und Wand umschlangen
 Mit den Zweigen inniglich,

Aus dem Fenster blickt nun schweigend
 Lilla nach dem Wald hinaus,

俯ける面曲かなしげ、
見つむるか、葉鳴らす梢。

うれたくも心しづみて、
流れ去る小川のゆくへ、
葉を誘ふ風の行方を
寂しらに見やりもするか。

暴れまざる悲しの波や
吹きすすさぶ烈しの風や
侘住の少女がほこり、
音を立て、時ぞながる。

——レリーナウ。

Thr Gesichtchen traurig neigend,
Blickt sie nach dem Laubgebraus.

Und sie sieht's mit stillem Sinnen,
Und sie sieht es bang gerührt,
Wie die Wasser niederrinnen,
Wie der Wind das Laub entführt.

Lauter wogt der Bach und trüber,
Lauter wird der Lüfte Streit,
Hörbar rauscht die Zeit vorüber
An des Mädchens Einsamkeit.

—Lenau.

夕の平和

燕つばめ 軒端のきばに歸り來て
歌に羽はねばたく黄昏たそがれや、
都も里も静まりぬ、
屋敷も部屋へやも静まりぬ。

空くらを染めたる殘照ざんしょうの
影かげ、静かなる地に曳けば、
寝ねに就く前に使者はいふ、
『樂しき朝や明けぬらむ』。

—リユッケルト。

ABENDFRIEDE.

Die Schwalbe schwingt zum Abendliede
Sich auf das Stänglein unterm Dach,
Im Feld und in der Stadt ist Friede,
Fried' ist im Haus und im Gemach.

Ein Schimmer fällt vom Abendrote
Leis in die stille Strass' herein,
Und vor'm Entschlafen sagt der Bote :
Es werd' ein schöner Morgen sein.

—Rückert.

HEKTORS ABSCHIED.

Andromache.

Will sich Hektor ewig von mir wenden,
Wo Achill mit den unnahbaren Händen
Dem Patroklos schrecklich Opfer bringt?
Wer wird künftig deinen Kleinen lehren

ヘクトールのわかれ

アンドロマッヘ

國に仇なすアヒレスが
近づきがたき手力に、
パトロクルスが犠牲と、
滅ぶる味方多かるを、
われを残して、どこしへに
もの恐ろしき戦場へ
わが夫よ、君は行きますか？

Speere werfen und die Götter ehren,
Wenn der finstre Orkus dich verschlingt?

Hektor.

Teures Weib, gebiete deinen Thränen!
Nach der Feldschlacht ist mein feurig Schnen,
Diese Arme schützen Pergamus.

柱とたのむ夫の君が
亡き人数に入りもせば、
鎗投ぐ術を教へんに、
國つ皇祖を祀らんに、
吾子の未來を如何にせむ？

ヘクトール

さはれ、愛しき吾妻よ！
御身が涙を押しどめよ。
戦の場に行かんこそ
ととめ難かるわが願。
トロヤの城を護らんに、

Kämpend für den heil'gen Herd der Götter
Fall' ich, und des Vaterlandes Retter—
Steig' ich nieder zu dem styg'schen Fluss.

Andromache.

Nimmer lausch' ich deiner Waffen Schalle,
Müßig liegt dein Eisen in der Halle,

此腕ならで何かあらむ。
國つ皇祖のおん爲に、
生命棄てんは願なり。
生れし國の救護者と、
何をためらふ此身かは、
冥府流るゝコチュートスの
河邊へ、いざや、下り立たむ。

アンドロマッへ

然らん上は、永劫に
御腰のものゝ音は絶え、
主無き宿の廣居間に

Priams grosser Heldenstamm verdirbt.
Du wirst hingehn, wo kein Tag mehr scheint,
Der Cocytus durch die Wüsten weinet,
Deine Liebe in Lethe stirbt.

Hektor.

All mein Sehnen will ich, all mein Denken,

太刀も空しく懸るらむ。
プリアムスより血を享けし
勇者が後裔も絶えぬべし。
日影照らさぬ黄泉の果
荒野横ざるコチユトッスの
流悲しくむせぶ界へ、
君、行きまさんあかつきは、
レテの水ともろともに
君が愛情も滅ぶらむ。

ヘクトール

うつし世慕ふあこがれは、

此世にありしおもひでは、
流しづけき忘河の
水底深く沈め果つとも、
妻をば思ふヘクトルが
情はいかで棄て果つべき？
いで、物音の聞ゆるは
城に寄せたる敵ならむ、
太刀をば疾く帯ばしめよ！
分袂を惜む隙あらじ。
悲嘆をやめよ、ヘクトルの
愛情は水に朽ちざらむ。

—シルレル。

In des Lethe stillen Strom versenken,

Aber meine Liebe nicht.

Horch! der Wilde tobt schon an den Mauern,

Gürte mir das Schwert um, lass das Trauern!

Heklors Liebe stirbt im Lethe nicht.

—Schiller.

翼^{つばさ} 延^{のび} 紅^{べに} 雀^{すずめ}
 巢^す 立^た ち 延^{のび} ぶ 離^{おち} れ
 巢^す 立^た ち に ける が、 紅^{べに} 雀^{すずめ}
 巢^す く ふ に、 處^{ところ} あ ら ば や と
 森^{もり} や 林^{はやし} と 眺^{なが} め 見^み ぬ。
 謂^い は ず や 世^よ に も、 『わ が 竈^{いば} の
 價^{あたい} — 黄^こ 金^{がね} に 位^{くらゐ} す』 と、
 さ て も、 健^{けん} 氣^{けい} の 行^{ふる} 動^{まひ} よ！

DER HÄNFLING.

I.

Ein Hänfling, den der erste Flug
 Aus seiner Eltern Neste trug,
 Hub an, die Wälder zu schauen,
 Und kriegte Lust sich anzubauen.
 Ein edler Trieb—denn eigner Herd
 Ist, sagt das Sprichwort, Goldes wert.

他^よ雀、
所^そに危難の
在^りしは、
は、
億^{しよ}倅^{ばせ}か。

三

風^{あらし}雨^しに、
雷^{らい}に、
毀^こたれぬ。

巢^{あな}は成^りぬれば、
襲^{おそ}はれつ、

斯^かかる住^{すま}居^かぞ數^{かず}あらぬ。』

二

「此^こ處^こに王^{わう}者^{じや}とわ
れ住^{すま}まむ、
榲^かの大^{おほ}樹^きぞ眼^めに
入^いりぬ。

2.

Die stolze Glut der jungen Brust
Macht' ihm zu einem Eichbaum Lust.
Hier wohn' ich, sprach er, wie ein König,
Dergleichen Nester giebt es wenig.
Kaum stund das Nest, so ward's verheert
Und durch ken Donnerstrahl verzehrt.

3.

Es war ein Glück bei der Gefahr,
Dass unser Hänfling auswärts war ;

懈かまの倒たふれに氣きもひるみ
 翻かまし、意こころ志ち、誤あやまか？
 此こゝ度たびは低ひき地ちの上うへ、
 茂しげ林みの陰かげに巢ねくひしが、
 塵ちりよ、埃あかよ、蟲むしけらよ、
 懊惱なやみに堪たへぬ、紅べに雀すずめ。

四

風あらし雨しの後あとを歸かへり來きて、
 視みれば、挫くけし懈かまの樹きよ。
 いいたく驚おどく胸むねの中ちゆう、
 此こゝ處ところ、危あやうしと悟さとりけり。

Er kam, nachdem es ausgewittert,
 Und fand die Eiche halb zerschlittert.
 Da sah er mit Bestürzung ein,
 Er könne hier nicht sicher sein.

4.

Mit umgekehrtem Eigensinn
 Begab er sich zur Erde hin
 Und baut in niedriges Gesträuche,—
 So scheu macht' ihn der Fall der Eiche.
 Doch Staub und Würmer zwangen ihn,
 Zum andern Mal davon zu ziehen.

斯くて、擇びし終の家は
 茂み程よき樹の葉蔭、
 虚空の雲も近からず、
 眼前地の障あらず、
 静けき處、其處にして
 雀、樂しく住まふ哉。

—***—

五

5.

Da baut er sich das dritte Haus
 Und las ein dunkles Büschen aus,
 Wo er den Wolken nicht so nahe,
 Doch nicht die Erde vor sich sahe.—
 Ein Ort, der in der Ruhe liegt,
 Da lebt er noch und lebt vergnügt.

我等が運命、あゝ、いかに？
 落ちゆく先は、地の上一
 光り、輝やき、美しく
 『げにも行方^{ゆかた}の思はるゝ！
 彼等がうたふ聲きけば、
 闇の夜、耳をそばだて、
 玉なす露^{つゆ}滴^た落ちにける。
 さゞめきつゝ、ぞ虚空^{そら}より
 運命

MENSCHENLOOSE.

Vom Himmel zogen rauschen
 Viel runde Tropfen sacht ;
 Ich hörte lauschend, lauschend
 Ihr Lied in dunkler Nacht :

Wie wir so traulich wallen,
 „ So hell, so klar, so rein,
 Welch' Loos wird, wenn wir fallen,
 Auf Erden unser sein ? ”

Auf Lüften fiel der Feine,
Und schwelgte im Genuss,
Geliebt vom Sonnenschein,
Starbt er von seinem Kuss.

Im Meere nahm den Zweiten
Still auf der Muschel Schoss,
Der ward für Ewigkeiten
Zur Perle hell und gross.

Ein Andrer fiel auf Eisen,
Das just von Flammen rot—

ひとつは、花の上
に落ち、食に飽
き、
日影の君に慕は
れて、
其接吻に身まか
りぬ。

ひとつは、海の底
に落ち、
静かに貝のふと
ころに、
光も清く、大い
なる
真珠とこそは残
りけれ。

またのひとは、
鉄の上
にけり

かくて、嘆きつ、呻きつ、
其身は燃えて滅びけり。

落つる露滴の尙ひとつ
空吹く風と戯れしが、
地にいたらぬ途次
姿は、いつか消え失せにける。

—フランケル。

Und brannte sich mit leisen
Und flücht'gen Seufzern tot.
Der Vierte der Genossen
Trieb mit den Lüften Spiel,
Und war schon leicht zerfließen,
Eh' er zur Erde fiel.

—Frankl.

來よ、わが手の紐の
 わが手の紐の
 導くがまゝに、
 涼しき流の
 縁に沿ひて、
 しづくと
 迎り來よ。
 照る日を避けて、
 緑草野邊

小羊

KOMM, MEIN LAMM.

Komm, mein Lamm,
 Lass dich am
 Treuen Band
 Dieser Hand
 Führen sanft
 Hin am Ranft
 Kühler Flut,
 Fern der Glut,
 Durch den Tau

花 咲 き み だ れ、
 微 風、 叢 に
 戯 ぶ る、
 花 野 の 露 を
 分 け て 来 よ
 心 や す ら じ、
 わ れ に 汝 が 身 を
 任 せ よ や。
 わ が 守 る と ころ、
 汝 が 身 な や ま す
 も の と ち ら ず、
 汝 が 身 く る し む

Dieser Au',
 Wo im Grün
 Blumen blühn,
 Und der Hauch
 Spielt im Strauch.
 Wohlgemut
 Meiner Hut
 Gieb dich hin!
 Wo ich bin,
 Ist keine Leid
 Dir bereit
 Keiner Not

ものごとてあらず。
路に迷はで
唯、わが跡を
追ひて來よ。
われや、牧童、
汝を導ひき、
心たのしく
唯汝が爲めに
此身をさゝげ、
汝し^な在^ませば
この身たのしく、
安き汝が身を

Dir gedroht.
Folge nur
Meiner Spur
Unverirrt!
Ich, dein Hirt,
Führe dich;
Freue mich,
Dir allein
Mich zu weihen;
Bin uur, wo
Du's bist, froh;
Ruhig, wann

歌麗はしく、樂しげに
雲雀、虚空に翻りつゝ、
花の香薫する森の中に
樂師が合奏、震ふ哉。

愛の祭

見るにつけてぞ
この身安けき、
笈をば振りて
汝が身のおそれ
退けつゝ、

リユツケルト。

Ich dich kann
Ruhig schauen,
Dir das Grau'n
Mit dem Stab
Wehrend ab.
—Rückert.

LIEBESFEIER.

An ihren bunten Liedern kletterte
Die Lerche selig in die Luft ;
Ein Jubelchor von Sängern schmettert
Im Walde, voller Blüt' und Duft.

Da sind, so weit die Blicke gleiten,
Altäre festlich auf gebaut,
Und all' die tausend Herzen läuten
Zur Liebesfeier dringend laut.

Der Lenz hat Rosen angezündet
An Leuchtern von Smaragd im Dom
Und jede Seele schillt und mündet
Hinüber in den Opferstrom.

—Lenau.

遠く眼をひく丘の上
祭壇、厳とつくられつ。
愛の祭に押し寄せて、
どよめき騒ぐ、千の胸。

森堂の緑玉の燈明邊に
春、紅の薔薇を燃やし、
心、靈の濤は漲りて、
犠牲の流に注ぐかな。

—レリーナウ。

冷霧閉ざせるこの谿の
 苦しき底を逃れんに、
 往くべき路のありもせば、
 其嬉しさを如何ならむ！
 緑は永久に新らしく、
 麗はしき丘見ゆるかな。
 鳥の翼をわが持たば、
 丘をば指して翔らんを。

—

あ
こ
が
れ

SEHUSUCHT.

I.

Ach, aus dieses Thales Gründen,
 Die der kalte Nebel drückt,
 Könnt' ich doch den Ausgang finden,
 Ach, wie fühlt' ich mich beglückt!
 Dort erblick' ich schöne Hügel,
 Ewig jung und ewig grün!
 Hätt' ich Schwingen, hätt' ich Flügel,
 Nach den Hügeln zög ich hin.

嚴げん丘か招まね陰いん來きそ天てん音おと
 寒かん邊べく暗あんるよ人ひと調てう
 冬ふゆ春はるは繁ひらは吹ふ取とあ
 に吹ふ果はる著し風かぜらし
 枯かく實み樹こるさ送おくすく
 れも草くさ黄わう葉は花はなの音ね聞き
 せず。花はな金かねか香かの音ねは
 いろ。

二

2.

Harmonieen hör ich klingen,
 Töne süßer Himmelsruh,
 Und die leichten Winde bringen
 Mir der Dülte Balsam zu.
 Goldne Früchte seh' ich glühen,
 Winkend zwischen dunkeln Laub,
 Und die Blumen, die dort blühen,
 Werden keines Winters Raub.

永久の光を浴びもせば、
心は如何に若やがむ！
丘の邊かよふ天つ風
その爽やかさ如何ばかり！
されど、行路を横ぎりて
流あらぶる大河や。
高打つ波を打ち見は、
胸元、震ふ心地かな。

三

3.

Ach, wie schön muss sich's ergehen
Dort im ew'gen Sonnenschein!
Und die Luft auf jenen Höhen—
O, wie labend muss sie sein!
Doch mir wehrt des Stromes Toben,
Der ergrimmt dazwischen braust;
Seine Wellen sind gehoben,
Dass die Seele mir ergraust.

岸にたいよふ舟あれど、
 掉さす人の影あらず。
 いざや、疾く乗れ、踏はで！
 帆は、今、靈風を孕みたり。
 運命は神のものたれば、
 能力たよりて進むべし。
 汝を仙境に送らんは、
 唯、不可思議の力のみ。

—シルレル。

四

4.

Einen Nachen seh' ich schwanken,
 Aber, ach! der Fährmann fehlt.
 Frisch hinein und ohne Wanken!
 Seine Segel sind beseelt.
 Du musst glauben, du musst wagen,
 Denn die Götter leihn kein Pfand;
 Nur ein Wunder kann dich tragen
 In das schöne Wunderland.

—Schiller.

銀泉

愛^はしき少女よ、美^はしき少女よ！
 汝^いは見^みつや、熱^{あつ}き胸^{むね}の
 渴^{かわ}しづめん水を飲^のむと、
 泉^いに行^いける若^{わか}き者^{もの}を？
 焦^{あせ}心^{こころ}に堪^たへで跪^{ひざまづ}いて、
 女神^{めがみ}と彼は呼^よびぬ。

SILBERQUELLE.

1.

Hast, liebes Mädchen, frisch und jung,
 Du jenen Mann gesehen,
 In heissen Durst nach Labetrunk
 Zur kühlen Quelle gehn?
 Noll Sehnsucht bog er ihr sein Knie,
 Und Göttin, Göttin nannt' er sie.

宛然まがら若く、
泉と清き少女！
顔美く、
恥も知らず、

三

其足あし下もとに倒れ伏しぬ。
甘き眠ねは彼を襲ひ、
夢路ゆみちゆらゝに運びゆきぬ。

少女せうにょ、涼しき水を授け、
男おとこが胸むねを癒いしたるに、
氣力きりよくを得たる若き者は

二

2.

Und als sie seinen Durst gestillt
Mit ihrem süßen Trank,
Und neubelebt und krafterfüllt
Er ihr zu Füßen sank :

Da schlief er ein und ohne Dank
Trug ihn hinweg im loser Gang.

3.

O Mädchen, wie die Quelle rein,
Unschuldig, frisch und schön,

見わたす極み灰色に
暮れゆく野邊の静けさよ
森又谿の上はるか、
清くも澄みぬ、夜の空。

夜の聲

並ての友がたどる路の、
悲しき運命は追はであれな！
人に情を吸ましめなば、
汝が身、涙の泉たらむ！
—ヘルデル。

Ach, lass es nicht dein Schicksal sein,
Lass nie dir's also gehn,
Dass, wenn du andere erfreust,
Du selbst die Tränen quelle.
—Herder.

STIMMEN DER NACHT

Weit tiefe, bleiche, stille Felder—
O, wie mich das freut,
Über alle, alle Thäler, Wälder
Die prächtige Einsamkeit!

Aus der Stadt nur schlagen die Glocken
Über die Wipfel herein,
Ein Reh hebt den Kopf erschrocken
Und schlummert gleich wieder ein.

Der Wald aber rühret die Wipfel
Im Schlaf von der Felsenwand,
Denn der Herr über die Gipfel
Und segnet das stille Land.

—Eichendorf.

森の梢を傳ひ來て
市より響く鐘の音や、
小鹿、首をふと擡げ
又睡眠に歸りけり。

静けき此世幸はふと、
丘邊、御神の行きませば、
巖の床に夢みつゝ
森は、梢の葉をぞゆすぶる。

—アイヒェンドルフ。

げ	一 <small>ひと</small>	一 <small>ひと</small>	二 <small>ふた</small>	心	け	女	村
に、	つ	つ	つ	た	ふ、	の	の
麗	は	の	の	の	早 <small>あひ</small>	老 <small>ふた</small>	は
は	い	花	花	し	旦 <small>がた</small>	若 <small>り</small>	づ
し	と	は	を	く	の	が	れ
き	と	萎	持	行	逍 <small>せう</small>	憩	の
蓄 <small>は</small>	句 <small>は</small>	れ	て	き	遙 <small>よう</small>	ひ	叢 <small>くさ</small>
薇 <small>ら</small>	は	果	り	し	に	け	林 <small>むら</small>
の	し	て、	し	時		る、	に
花	く		が、				
の							

伶人が漂泊の歌

SPIELMANN'S WANDERLIED.

Hinter dem Dorfe bei'm Weidengebüsch
 Sass eine Junge und Alte,
 Als ich heut' morgen so frei und frisch
 Dorten vorüber walte.

Hatte zwei Röslein, das eine war bleich,
 Hing verwelkt und lose,
 Aber das andere war düsterisch,
 Eine gar prächtige Rose.

二人、
通り過ぎんと
またる時
うれひの面相や

若きが膝に落ちけるよ。
萎れ果てたる薔薇の花、
老いたるもの、膝の上に。
色も香もある薔薇の花、

物や思へる女子に
ふたつの花を投げゝるが、
霎時が程をたゞすみて
眼、
鋭にわれや視し。

Und da warf ich die Rosen hin
Nach den sinnenden Frauen ;
Wie ich stehen geblieben bin,
Macht' ich verwundert schauen,

Dass das blühende Röselein
Lag der Alten im Schosse,
Aber der Jungen fiel hinein
Die verwelkende Rose.

Beide hat es traurig gemacht,
Als ich vorüberwallte.

Hat wohl die Junge der Zukunft gedacht
Und der Jugend die Alte?

—Becker.

WUNSCH AM ABEND.

Sturm gestillt zu leisem Hauch,
Welch ein Abendfrieden—
Wär' einst meinem Leben auch
Solch' ein End' bescheiden!

—Greif.

若きは未来を想ひやり、
老は往時を慕ひけむ。

—ベッケル。

夕のねがひ

暴風は止みぬ、風和ぎぬ、
夕の空の静けさよ——
此世の旅を終へなんに、
斯かる運命を、わが持たば！

—ケルアイフ。

森の慰籍

懊惱なやみに堪へで唯ひとり
森をさまよふ老人、
賤せうしき衣ころも身に纏まとひ、
貧ひんしげの其姿さまや。

身をば杖に持たせつゝ、
四隣あたりを見やる悲しさ、
胸むねなやませる老人おひとの
願ねがふもの、何なりや？

WALDTROST.

Im Walde schleicht ein alter Mann,
Allein mit seinem Leid,
Er ist so ärmlich angetan
Mit einem Lodenkleid.

Er blickt so traurig um sich her,
An seinen Stab gelehnt ;
Dem Manne ist's im Herzen schwer,
Wonach er wohl sich sehnt ?

Den Bäumen nimmt der Herbst das Laub,
Der Tod im Walde tost,
Der Alte starrt in den Stab,
Als sucht' er dort sich Trost.

Vom Dickicht vor ihn ein Reh,
Und hält, und will nicht fliehn,
Als wär's gerührt von seinem Weh,
Als wollt' es trösten ihn.

Schau tief dem Reh, du armer Mann,
In seinen Kindesblick,

樹の葉、秋に枯れ落ちて、
死の神暴らぶる森蔭。
慰藉得んと老人、
杖にすがりて視つめたり。

今ぞ、茂林を出で来り、
逃げもやらす、小牝鹿、
彼が懊惱を覺り氣に、
慰め顔に止まりぬ。

憐の者よ、小牝鹿の
あどなき眼視よや！

野
葡
萄
終

君が心の苦惱をば
慰めんかな、優しまなざし。
——レリーナウ。

Vielleicht der Blick dir lindern kann
Dein trauriges Gefühl.

—Lenau.

森

蔭

『森蔭』收むるところ、十四篇。全く吾創意に成りたるものなきに非ずと雖、其多くは、獨詩の反影といふを得べく、或は全く原詩の想と形とを摸したるものあり。或は其或部分を取捨し、變形し、殆んど自からの作となしたるものあり。之を翻詩と言はゞ言ひ得む。創作と言はゞ言ひ得む。これ、此譯詩集に添へたる所以。素より、之を以て未だ吾集となして世に示すに足らず。唯、此に留めて、いさゝかの勞苦を慰め、かつは、自からの經路を偲ばんとするのみ。

耳底にひそむは何のさゝやきぞ
人には秘めむ森かげの夢

蘆風

森蔭

さまよひ人の歌

森の宿^{やどり}を立ちいで、
終日^{ひね}、市の漂泊^{さまよひ}に
足も疲れぬ、聲も唄れぬ。
琴持つ腕も勞れたり。

一日、街の戸に立ちて
獲たる小銭は幾何ぞ
旅館に入るに足らずとも、
夕餉の料には餘あり。

空を染めたる夕暮の
日も早や西に傾きぬ。
あゝ！飛ぶ鳥の影を追ひて
彼方の森にわれも急がむ。

塵の卷を離れたる
森こそわれの宿なれ。

深く茂れる檜の葉の
蔭こそわれの寢床なれ。

いでや、静けき野の森の
繁る樹枝を屋根となし、
緑の草を褥とし、
今宵は此處に宿らまし。

市に入り来る旅人は
高樓の宿泊を急げども、
静けき宿を希ふ
われは森にご急ぐかな。

足の汚を洗はんに
盥に盛れる水は無くも、
草鞋の土を落さん
其處には清き流あり。

體軀の汗を拭はん
温き厨の湯は無くも、
巷の塵を潔めん
此處には涼しき泉あり。

若し夫れ、月影明かき夜を
森の沐浴も爲し終へて、

夕餉のパンに向はんか、
高樓の饗應も何ならん。

疲れし身をば横たへて
小琴を抱き眠りなば、
耳にさゝやく溪川の
調、奇しき響あらん。

げに、静かなる夜の森の
自然の樂よ、將た歌よ。
われに睡眠を誘なへば、
胸は忽然——醉ふが如。

足の悩みも忘られて、
安き眠は、ほしいまゝ。
樂しき夢の覺むる迄
われを守らん、森の精——

身はそれ、行途さだめ無き
世を漂泊の我なれば、
途に日暮れて宿らんに
安きをこそは唯ねがへ。

藝の報酬に事足りて
黄金、高樓も望まねば、

其日、其日の氣は安く、
世は斯くてこそ樂しけれ——

あゝ日は落ちぬ、鳥も歸りぬ！
けふの旅路の終りたれば、
静けき森の森かけの
安き眠にわれや入りなむ。

行くはいづこ

面影こそは眼に觸れたれ——
汝が聲まだしも響かざれど、
奇しや、血潮は火焰と揺らぎ、
我身を襲ひぬ、美し流。

流は胸底——深處に入りつ。
渦巻く潮は心を呑んで、
他界——彼方へ運び去りぬ。

實に是れ、御神が「戀の裁決」。

宣告——汝が聲、それに因りて
我身の運命は分るべきに。
胸をぞ襲ひし、噫、かの流、

吾靈誘ひて行くは何處？
或は天上——花咲く樂園か、
將又、地の底——闇の野邊か。

歌の息子

一

夏の日中を 樵夫が息子、
薪背負うて 山坂くだり、
櫟林の側まで来たが、
咽喉が渴くに

肩さへ痛む、
—— 肩さへ痛む。

二

谿間見やれば、さら、さら、
流るゝ水の音おもしろや、
胸は渴くに 路なほ遠し。
行けよ、行け、行け、

誰ためらはむ、
—— 誰ためらはむ。

三

『谿間流るゝ 小川の水に
まざる甘酒、 復あるべしや。』

汲んで、掬んで、飲み飲む途端
足が辿つて

身はそれなりよ、

——身はそれなりよ。

四

往さ歸さの山みち三里、
朝な夕なのおもしろ歌に
里に名を得た樵夫が息子。
水の行方と

歸りもせぬが、

——歸りもせぬが。

五

歌に名を得た樵夫が息子、
水に溺れて幾春秋よ。
谿の小川の水涸れ果つも、

「歌の息子」が

名はいつ迄ぞ、

——名はいつ迄ぞ。

夜の侶

日の影の

語りて曰く。

『星影よ、

われに従ひ

君も亦

晝を行かずや？』

星影は

答へて曰ひぬ。

『わが光

君に適はず、

騒がしき

世をし厭へば、

寧ろわれ

夜をや守らむ。』

二

星影は

月にと往きつ。

『月影よ、

君に従ひ

われも亦
夜をや守らむ。』

月影は

答へて曰ひぬ。

星影よ、

ようこそまゐれ、

汝こそは

實にわが侶ぞ！

もろともに

夜をや守らむ。』

三

月と星、

相むつまじく、

宵々を

月影照れば、

夜な夜なを

星も輝やく。

あゝ、月よ、

又 星影よ！

われも亦

汝等が友ぞ！

もろともに

平和を伴の、

しづかなる

夜を慕ひつゝ………。

かたれ小鳥

語れ小鳥よ、

汝が往く方はいづらぞと！

『いづらと辨かず、

心のまゝに

往けばおのづと道たゞし。』

二

語れ小鳥よ、

心のねがひ何なると！

『そよ吹く風よ、

花のかをりよ、

あらたの春ぞわがねがひ。』

三

遙けき里よ、

まだ見ぬ里を汝は戀ふか？

『君よ、あまりに

言問ふなかれ、
答へまつるに煩はし。』

四

こゝろ定めて、

鳥は飛びゆく海のはて！

『そよ吹く風よ、

花のかをりよ、

たのしき里に鳥は來ぬ。

愛 鍵

辛^{から}き涙は頬をつたひ、
苦^くしき呼吸^{いき}は胸に迫り、
燃^もゆるは思、湧^もくは血潮。
吾^{わが}眼^めは頻りに君を尋ぬ。

ほゝるみ優しき君と遇ふや、
忽^{たちまち}やはらく胸の思。
身を焼く火焰^{くわん}の中^{なか}を出で、

生^{せい}得^{とく}し此身は、救^{すけ}はれ人^{ひと}か。

さもあれ、別れて君ゆく時、
運^{うん}命^{めい}の星光^{せいこう}身をば離^{わか}り、
氷と冷えぬる我胸、我血。

愛^{あい}鍵^{けん}、茲^{こゝ}に、胸^{むね}扉^{ひら}押せば。
靈^{れい}魂^{こん}、羽^はばたき逃^にれいで、
遠^{とほ}なる光の影を追ふよ。

薔薇初花

牧場の羊が春のたはぶれ——
薔薇の枝を咬みても見れど、
あどなさすさび、なかくくに
興あるものと思ひては
薔薇、悩みもあらざりける。

枝に觸れしは、されど罪かや、
棘に摘まれて、和膚の
綿毛は枝に球と残れど、

痛みも何か？小羊に、
さしたる障害はなかりけり。

薔薇、眞白の球を獲て
こは、珍らかの寶ぞと、
鋭き指、確かとぞ抱きける。

春の日影のどけさに、
巢くふに、處を索めばやと、
緑の野邊のあこがれに、
春の伶人——鶯は
薔薇の方へ寄り來しが、

優しき聲をしぼりつゝ、――

『あはれ、あはれ、薔薇の君！
御身の寶は誰に得しや？
珍らし、美しくし、眞白の眞珠！
あゝ、われ、伶人、身をひれ伏して
此世の願を君に問はむ。
珍らし、美しくし、眞白の眞珠！
雲らく此身に貸し給はずや、
此世の願の足らば、如何に？
吾家成りなば、あゝ又如何に？
此身は伶人、聲も優に

新の曲をば高う揚げて、
厚き情に酬ゐまつらむ。

願は許りけり。巢もつくられぬ。

新住成りける長閑のあした、
伶人――鶯、聲張りあげて
春の譜新たに、音もいと清く
樂しき歌をぞ囀りぬれば、
其音やをかしき、調や奇しき――
緑ぞ萌えぬる枝の葉蔭、
薔薇は、紅、花と笑みぬ。

どこへ行く

一

行く水よ！

里をば過ぎて

どこへ行く——

疲れし脚あしを休めんと、

山をば下り、里をば過ぎて、

静けき海に

われは行く。

二

吹く風よ！

谿をば越えて

どこへ行く——

疲れし胸を休めんと、

野をゆき又は、谿をば越えて

遠き巖窟いわやに

われは行く。

三

行く雲よ！

天そらをば過ぎて

どこへ行く——

疲れし身をば休めんと、
峰をば離れ、天をば過ぎて
乾ける野邊に
われは行く。

四

飛ぶ鳥よ！
里をば出で、
どこへ行く——
疲れし翅休めんと、
人をば離れ、里をば出で、
森の静枝に
われは行く。

五

あゝ、靈よ！
雲をば越えて
どこへ行く——
疲れし身をば休めんと、
人の世棄て、雲をば越えて
安き天國に
われは行く。

まひるの甘夢

暑き日、わが胸渴くや頻り——
咽喉を湿さん覆盆子やあると、
樹蔭の小草を分けつゝ行くに、
何時しか来りぬ、身は森深く。

繁れる樹立の開くる處、
煌ゆき光に眼を轉じ、
と見れば燦たる泉のほとり、

艶なる姿の天女ぞ立てる。

身は夫れ忽然、憧憬心地——
尊き御影に寄らんとすれば、
翼も軽やか天女は去りつ。

白晝の甘夢、今、將、消えて
樂しき希望も、あゝ、又失せぬ！
濃深き盛夏の緑も共に——。

野の思

草こそは結ばざりけれ。
春の野のそゞろ戀しく、
腥^{めざ}めてもなほ夢心地^{ゆめこち}、
けふも亦、こゝにわれ來ぬ。

この道や幾^いゆきかへり！
柔らかき風に吹かれて、
堇^{すみれ}花摘みはしたれど。
そをやらん君はいづこに。

彼の橋や幾^いわたりせし！
ゆるく去る流のぞみて、
草笛に思は吹けど。
そを聽かん君はいづこに。

草を藉^しき、空を仰ぎて、
堪へがたき胸の思や。
思ひ去り、思ひ來りて
幾たびか思に歸る——

* * * *

見かへれば、
遠の村里、
夕ぐれの
霞こめたり。

菅の根の
長き春日も、
君待つと
暮れにけるかな。

鳥のわかれ

いざさらば
君とわかれん、

森よ！ゆかしの君とわかれて
遙けき里へわれ行かん、
秋風とくも吹き暴れて
樹の葉は既に枯れ落ちぬ。

いざさらば
君とわかれん、

森よ！暫時は深山の床に
安き眠を結べかし！
冬の長夜を星くづは
君が守衛と耀やかん。

いざさらば

君とわかれん、

森よ！四邊の谿又丘邊
寂しき光景と變ることも、
やがては春の廻り來て
緑は更に若やかん。

いざさらば

君とわかれん、

森よ！新の春來んまでは
安き眠に酔ゑよかし！
夢より君の醒むるころ
われは再び來るべし。

いざさらば

君とわかれん。

うた人去りぬ

あゝ、春ゆきたり！春をば追ひて
あゝ、又、詩人此世を去りぬ！
芳ふは花の香、歌ふは鳥の
樂しき聖園を慕ひて逝きぬ。

寂しや、汝等が行きにしこの世――
小鳥の歌息み、花の香僭み、
さゝらぐ泉の調も涸れて、

妙なる風の絃さへ截れぬ。

あゝ、春ゆきたり！詩人去りぬ！！
樂しき歌こゑ、奇しきしらべ、
今、將、響くは、何處の御空？

夏往き、秋去り、冬又暮れて、
再來らん春こそ待たぬ。
逝きにし君をば待つ効あらんや？

――暮春人の死を悼みて――

砂漠の果實

砂漠の中に生ひいで、
たゞ一本の樹は育ちぬ。
熱き日光は根をさへ蒸して
渴ける枝に雨も注かず。

枯れなにごとする葉の蔭に、
をぞくも一つの實は結ばれぬ。
彼は満身の精を注いで、
その實の熱するを待ちぬ。

かくて、時季は來りぬ、
その實漸くわからみて、
やがて落ちんの時は來ぬ。

幹に寄り添ふ人だも無し——
荒れに荒れたる砂漠にして、
果實は、唯、獨、空しく落ちて腐たれ果てけり！

月見草

あしたの露によみがへり
なべての花は野にひらき、
晝の光を身にうけて
色こそ増され、香こそ匂へ。

ゆうべの露を胸に得て
ひとつの草の花は咲き、
日の影消ゆる頃待ちて
やさしき花は咲きいでぬ。

かくて優しき野邊の花
獨さびしく立ちけるが、
ある夜ひそかに天の月
雲の隙ひまよりうかゞひぬ。

「あはれわが友、野の花よ！
ひとり淋しき君が姿、
なべての花の憇ふとき
何とて君の腥なまめたる」

「あまりに弱き花の身の
暑き日光ひかりに堪へぬのみか、

森
蔭
終

下界こののさわぎ厭いとへばぞ、
夜をこそ慕へ、天國そこそ慕へ。』
同じ静寂しじまを慕ふ身の
月の面貌おもは麗しく、
『さらば、わが友、夜の友よ！』
雲はみ空を鎖したり。
かくて静けさ宵々よよを
天あめなる方かたを戀ふるとて、
姿さびしく、又きよく
ひとり野に咲く、月見草の花。

註

詩人と其作

○アインシュルッフ Eichendorf

- 一 行遊小吟 (Wanderspruch)
- 二 碎けし指輪 (Das zerbrochne Ringlein)
- 三 牧童と獵夫 (Hirt und Jäger)
- 四 その日その日 (Werktag)
- 五 夜の聲 (Stimme der Nacht)

○レーナウ Lenau

- 一 海の胡蝶 (Der Schmetterling)
- 二 南を思ふ (Nach Süden)
- 三 愛の祭 (Liebesfeier)

四 森の慰藉 (Waldtrost)

○ リヒター Ricker

一 夕の歌 (Abendlied)

二 夕の平和 (Abendfriede)

三 小羊 (Kommi'mein Lamm)

○ ヴーラン Uland

一 小舟 (Das Schifflein)

二 歸郷 (Heimkehr)

○ グルアイフ Greif

一 彼女の墓 (Ihr Grab)

二 夕のねがひ (Wunsch am Abend)

○ シェーラー Schiller

一 ヘクトールのむかれ (Hektors Abschied)

二 あこがれ (Sehnsucht)

○ シェンケンベルフ Schenkendorf

一 柑子の花に寄する歌 (An eine Orangenblüte)

○ ローヴェ Löwe

一 石楠花賦 (Alpenrose)

○ ガイベル Geibel

一 二つの胸のわかるゝ時 (Wenn sich zwei Herzen scheiden)

○ ヴォーテ Goethe

一 涙の慰藉 (Trost der Thränen)

○ グライム Gleim

一 園女と蜜蜂 (Die Gärtnerin und die Biene)

○ フランクフルト Frankl

一 運命 (Menschentrose)

○ ヘルデル Herder

一 銀泉 (Silberquelle)

○ ミッテッセル Becker

一 伶人が漂泊の歌 (Spielmanns Wanderlied)

○ ……………

一 紅雀 (Die Hänfling)

注意 以上前編「野葡萄」に收むるもの、
題名は必ずしも直譯に因らず。

註

○ シェンケンドルフ

マックス、フォン、シェンケンドルフは、千七百八十三年十二月十一日テイルジートに生る。獨逸愛國詩人としてキョルチル。アルント等と共に著はる。されば其作る所多くは戰歌にして「國民軍の歌」「兵士の朝歌」「自由の歌」「祖國の春」「ラインの歌」等最名あり。而して本集收むるところの「柑子の花に寄する歌」一首は、余が詩人の集中に見たる抒情詩篇中の最優なるものとなす。詩人の本領は素より戰歌に在るを以

て詞句は餘りに美ならずと雖、可憐なるオレンヂの花に寄する異郷の思、何となく掬すべきものあり。情を抒ふる事、切。又以て愛國詩人の風格を想見するに足らんか。探て譯出したる所以なり。詩人は、千八百十三年ナポレオン軍の進撃に際して、露普聯合軍に加はり、戦後コーブレンツに顧門官たり。千八百十七年十二月十七日其地に歿しぬ。

○リッケルト

フリードリッヒ、リッケルトは、千七百八十八年五月十六日シュワインフルトに生る。學者として又詩人として自由戦争時代、多くの他の詩人中に一頭地を抜ける詩人なりき。學者としてはエルランゲン大

學に東洋語の教授を務め、又ベルリン大學に教授たる事數年に亘り、老を閑地に養ひて、千八百六十六年一月三十一日死す。リッケルトは其學識の博かりしと共に、其詩材を求むる事、亦極めて廣く、天地間の萬物、詩人の筆に觸れては、詩たらざるもの一もなきの觀あり。されば、叙事に、抒情に、將た劇詩に、或は祖國歌に筆を染めざるものとはあらざりき。従て其形式も極めて多方面に涉り、自由自在に詩筆を弄したりし事は、獨逸詩人中多く其比を見ざる所なり。詩篇幾百。歌集『戀の春(リーベスフリューリング)』又頗る名あり。本書中「小羊」の一篇は即『戀の春』中の一端なり。尙「夕の歌」は詩人の作中、

聲調最温雅なる名篇として幾種の歌集中に抄出せらるゝもの、第一及、第二節は温雅の調殊に掬すべきものあり。其他祖國歌の有名なるものには、「ゲハルニッシュテ、ゾチツテの愛國的精神に富める絶句幾篇あり。又「ライプツヒの戦」「バルバロッサ」「オツテンゼンの墳墓」等有名にして、尙幾多の宗教詩及叙事詩を作り、支邦の詩經を翻して「シィキン」幾篇をもものしぬ。『戀の春』の輕妙、艷美、奔放、優雅は讀者をして卷を掩ふ能はざらしめ、げに、春野の清興に弄ばるゝの思あり。シルレル、ゴエテ以外、ウーランド、アイヒェンドルフ、レーナウ等の詩篇と共に余が愛誦措かざるものは實にリッケルトなり。

○レーナウ

ニコラウス、レーナウは、千八百二年八月十三日匈牙利クザット村に生る。其詩沈痛、憂鬱の氣に富み、憂鬱詩人として千八百五十年八月二十二日遂に井インのほどりオーベル、デロブリンクの癡狂院に歿す。「メランコリ」に寄する歌あり。幾多の詩篇、常に心底の悲哀、憂愁を詐ふるの韻、そゞろに讀者の同情を催さしむ。聲調うるはしきものに、「春」「愛の祭」「葦の曲」「ヘルティの墓にて」「秋嘆」「郵夫の笛」「海の朝あけ」等あり。其他優篇少からず、本書載する所の「海の胡蝶(原題胡蝶)」は、海の胡蝶に寄せてフアウストの一生を咏じ、智識と信行との衝突を叙し

たるものなり。聲音又優雅なるを以て、之を邦韻に
試みつ。「南を思ふ(原題南方へ)」の歌は、故郷の戀人
を慕ふの情極めて切、聲調亦之に適ふところの逸品
なり。集中、『あこがれ』篇中の優品、又わが愛好の作
なり。「愛の祭」は、短篇なりと雖、譯詩能く原句の美
を傳ふるを得ず。尙『紛紅集』中可憐の短篇八首を
譯出せり。

○アイヒェンドルフ

ヨルセフ、フライヘル、フォン、アイヒェンドル
フは、千七百八十八年三月十日シュレージエン、ラティ
ポールのほどりルポルキッツ城に生れ、叙情詩人とし
て有名なり。千八百五十七年十一月二十六日ナイッセ

に歿す。ロマンティック派の小説家として中古文學崇
拜主義の詩人にして、小説の最名あるものは、即ア
ウス、デム、レーベン、アイチス、タウゲニヒツ、(無
性者の生活より)なり。アイヒェンドルフの詩歌は、
語句極めて平易、而も宗教的思想に富み、流麗、溫
雅、平凡に似て然らず、而も何となく感興を惹起せ
しむるものあるは此人の特徴なり。されば、詩人の
作は、盡く夫れ俗調に近き輕妙の韻にして、「獵夫の
わかれ」の如きは以て其一般を推すに足るべく、『逍
遙の歌』の幾篇は能く詩人の特性を發揮せるもの、常
に同様の句法を繰り返すものありと雖、流麗、崇高、
讀むに從て爽快を感せしむるものあるは此作なり。

尙『俗人生活』中に收むる幾十篇の詩篇は、詩人が詩的經路の反照にして、詩人が觀察、諷詠、以て高潔の思想を窺ふを得べく、輕妙なる詞句の中に、壯嚴なる宗教思想を味ふを得べし。尙折に觸れて詠めるもの、主として宗教思想を歌へるもの、及史譚體のもの等、幾百の詩篇の中にて最名高きものは、「碎けし指輪」「獵夫のわかれ」「行遊の歌」「春の夜」「月夜」「朝のいのり」「我兒の死を惜みて」等なり。書中收むる處の「碎けし指輪」はロマンツエの優品にして、聲調穩健、情極めて痛切を覺ゆ。「牧童と獵夫」の一篇は、「テルツェット(三曲)」中の末節を省畧し又篇中の一句を假りに省きて、わが抄出したるもの、別に新

らしどもあらねど、優しく清ければ取れるなりき。「行遊小吟」「夜の聲」等は詩人の傑作といふにあらねど、可憐掬すべきものあり、又以て其詩風を知るに足らんか。『紛紅集』中「旅情の歌」四篇其他優雅なる短篇五首を載せたり。

○ウーランド

ルドヴィヒ、ウーランドは、シュワープ派の詩人として最頭角を現はせる抒情詩人にして千七百八十七年四月二十六日チュービンゲンに生れ、千八百六十二年十一月十三日世を去りぬ。其最特技とする所は譚詩及歌謠に在り。獨逸バラードの最優なるものは勿論シルレルに在りと雖、近世の詩人ウーランドを

措きて又他に多く其比を見ざる所。聲調、穩和にして、詞句極めて艶麗。平易簡單の句法を使用して能く人情を詠出せり。其の有名なるものには、「春の歌」「海邊の城」「み寺」「小舟」「樂人ののろひ」「めしひの王」「小ロランダ」「ロランダ、シルドトレイゲル」等あり。其の他歌調捨てがたきもの數を知らず、本書收むる所、「小舟」の穩かなる、以て詩人の風韻を窺ふを得べく、「歸郷」は、「旅の歌」中の最後の篇なり。『紛紅集』中、「海邊の城」以下九首を收む。

○グライフス

マルテイイオン、グライフは、千八百三十九年六月十八日シュバイエルに生れ、尙生存せる詩人なりと

いふ。其作多くは短篇にして優雅、艶麗なるに似たり。『夕のねがひ』の可憐なる、「彼女の墓」の艶麗なる、以て其風格を窺ふに足らんか。氏は劇詩人として又多くの著作あり。

○グライム

ヨハン、ヰルヘルム、ルードヰヒ、グライムは、千七百十九年四月二日エルムストレイベンに生れ、千八百三年二月十八日歿す。ハルレ詩社（又普魯西亞詩社）中最傑出したる詩人にして、夙に軍歌グレナデイールを以て著はれ、寓意詩を以て名高かりき。本書載する處の「園女と蜜蜂」は即其最優なるもの、小品掬すべしと謂ふべし。尙宗教的教訓詩「赤書、

(ダス、ロレーテ、ブトフ)を著はして、自己の主張を述べ、又伊太利詩人、ペトラルカをも模倣したり。

○ガイベル

エマヌエル、ガイベルは千八百十五年十月十八日リュベックに生れ、近世抒情詩人中の傑出せる一人として知らる。戀、春、自由、誠忠、人格等は詩人が題材として幾百の詩篇を産出し、雅醇、及崇高を以て其特徴となす。されば、戀愛歌及祖國歌の作は、集めて詩集三卷となつて刊行せられたりき。本書抄出する所の「二つの胸のわかるゝ時」一篇は、卑俗の調を以て戀愛を歌へるもの、詩人が戀愛歌の一端を知るを得べし。此一篇は多くの歌集に抄出せらるゝ

に似たり。千八百八十四年四月六日死す。

○ヘルデル

ヨハン、ゴットフリート、ヘルデルは、千七百四十四年八月二十五日モールンゲンに生れ、千八百三年十二月十八日死す。自然詩人としてよりは寧ろ、當代の碩學として知られ、又詩歌の研究家、翻譯者として著はれ、後世幾多の詩人は、ヘルデルに依て教へられ、養はれたるもの頗る多しとなす。其最著名なる詩歌の作品は即、新古に亘りて各國の俗謡を流麗なる獨逸語に翻譯し、或は模倣したるものにして、外國の思想を獨逸文學に輸入したるの大功あり。集むる所の歌謡數百は、英、佛、伊、西其他の諸國に

亘り、千七百八十八年「ステイムメン、デア、フェルケル、イン、リीडェルン(歌謠に於ける國民の聲)」の題號の下に出版せられき。所謂ヘルデルが民謠集是なり。碩學ヘルデルは、實に、吾人の尊崇する偉人にして、その集も平素愛誦して惜かざる所なりといへども、俗歌の翻譯は、極めて困難を感ずるものから、茲に譯出したるは、「銀泉」一篇、もどこれ、英詩の翻譯なり。別に珍らしきにもあらねど、更に之を邦譯に附したるもの、末節殊に大要を取れり。尙ヘルデルは西班牙の武士譚チッド物語を翻譯して、叙事長詩、「デア、チット」の一卷を遺しぬ。民謠集と共に後世に傳はりて名高し。

○ゴエテ

ヨルフガング、フォン、ゴエテは、千七百四十九年八月二十八日フランクフルト、アム、マイン市に生れ、千八百三十二年三月二十二日ワイマールに於て歿す。獨逸第一流の詩人としてシルレルと共に盛名天下にかくれ無し。絶代の傑作「ファウスト」を始めとして幾篇の戯曲は言ふも更なり。詩篇に至ては、艶麗瀟洒を以て著はる。本書載する所の「涙の慰籍」は詩人が閱歷の一端なり。自然詩人なり。

○シルレル

フリードリッヒ、フォン、シルレルは、千七百五十九年三月十日ヰュルテンベルヒのマールバッハに生れ、

千八百五年五月九日ワイマールに歿す。ゴッテと並稱せらるゝ、獨逸第一流の詩人。戯曲、ヰルヘルムテ、以下幾篇は夙に人の愛誦する所、詩篇は、殊に名高く、譚詩及想詩、史詩を以て其特技とす。譚詩に屬するもの「手袋」「水くぐり」「ヘロー、レアンデル、」其他人の熟知する幾多の傑作あり。人文開化の發達進歩等を詠したる雄篇に「鐘の歌」あり。此他「理想」の歌、「理想と人生」「希獵の神達」等名篇、枚舉に遑あらず。雄渾壯大の調を以て著はれ、冥想詩人なり。本書僅かに、シルレル集中、最可憐なる、「ヘクトールのわかれ、」及「あこがれ」二篇を載せたるのみ、未だ之を以て其詩風を推すに足らずといへども他篇

は之を別冊に譲りたり。ヘクトールは、トロヤの王子、トロヤ戦争に際して希臘軍の進撃に當り、國難に殉ず。此詩もど、其處女作「ロイベル」曲中に收めらる。尙、『紛紅集』及『シルレル詩集』を参照すべし。此他、多くの詩人ありといへども、傑出せる詩人は概ね斯の如し、尙個々の詩人に就ては他日を期して別に記する處あるべく、茲には、唯、本書に關して讀者の参考までに數言を附加したるのみ。早々の際、遺漏は他日を期す、讀者希くは之を諒せられん事を。尙句點及一二の誤植再版修正を期す。

正 誤

- 26 — 第四句 Untergange ノ u ハ n の誤。
- 28 — Zu……以下二句ヲ前句ヨリ分ツ。
- 33 — 題名「……わかる時」ハ「……わかるゝ時」の誤。
- 38 — 第一節第一句 grüsst ノ u を除ク。
- 63 — 第二節を『 』ニテ包括ス。
- 65 — 喜び……以下の一節を『 』ニテ包括ス。
- 66 — 第五句 scön ハ schön ノ誤。
- 67 — 希願……以下一節を『 』ニテ包括ス。
- 69 — あくがれ……以下一節ヲ『 』ニテ包括ス。
- 126 — 第四句 Tränen quelle. ハ Tränenquelle seist. の誤。
- 146 — 第三句 入るにノ次はヲ加フ。
- 147 — 第六句 此處にハ其處にの誤。
- 188 — 第二節第一句ゆうべハゆふべの誤。

句點其他は再版の節に譲る。

明治三十八年十二月八日印刷
明治三十八年十二月十二日發行



著	發	印
者	行	刷
者	者	所

本郷區駒込追分町三番地	秋	元	喜	久
東京市本郷區千駄木林町百九十六番地	日	高	藤	兵
東京市京橋區日吉町四番地	渡	邊	爲	藏
東京市京橋區日吉町四番地	民	友	社	友

野葡萄與附
定價金參拾五錢
郵税金六錢

發行所

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

大 賣 捌

東京市京橋區尾張町	警 醒 社	筑後久留米市	菊竹書店
東京市京橋區表神保町	東 京 堂	靜岡市	吉見書店
東京市京橋區裏神保町	上 田 屋	橫濱市	第一有隣堂
東京市京橋區箔屋町	前 川	同	弘 集 堂
東京市京橋區南傳馬町	目 黒 書 店	同	勉 強 堂
東京市日本橋區通三丁目	林 平 次 郎	同	弘 文 堂
東京市日本橋區表神保町	修 學 堂	前橋市曲輪町	煥 乎 堂 書 店
大阪心齋橋南久太郎町	福 音 社	越後國水原	西 村 六 平
大阪南本町座摩ノ前	杉 本 書 店	新潟古町	西 村 支 店
大阪備後町四丁目	吉 岡 平 助	越後長岡	覺 張 次 平
京都三條寺町	聖 書 房	金澤市片町	宇 都 宮 書 店
京都二條寺町	若 林 書 店	高岡市守山町	學 海 堂 書 店
甲府市柳町壹丁目	大 塚 柳 正 堂	福井市佐桂枝中町	品 川 書 店
水戸泉町	川 又 銀 藏	信州長野市大門町	西 澤 喜 太 郎
野州足利町一丁目	青 木 書 店	信州松本本町	松 榮 堂
廣島市	積 善 館	信州諏訪町	日 進 堂
岡山市岡山町	奧 田 金 昌 堂	仙臺市新傳馬町	紀 港 堂
周防國岩國町	白 銀 日 新 堂	仙臺市大町五丁目	藤 崎 書 店
山口大市町	同 支 店	陸中一ノ關町	佐 藤 喜 年
高知市種崎町	澤 本 書 店	陸奥弘前市土手町	今 泉 道 太 郎
熊本市新町二丁目	長 崎 次 郎	青森市米町	同 支 店
熊本市	好 文 堂	秋田市茶町	成 見 清 兵 衛
鹿兒島市松山通り仲町	久 永 新 藏	北海道札幌區南一條四二丁目	富 貴 堂

明治三十八年十二月一日印刷

新刊發行の都度増補訂正す

有 倫 堂 出 版 書 目

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日 高 有 倫 堂

主意書

理想と光明とを經となし、趣味と利用とを緯となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての人物に、苟しくも文明の増進と風教の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯快なる新進文士たるとを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙り御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雜誌の精評を掲げ御觀覽に供し來たり候も漸次増加し其數多くして載せ盡す事不能不得止出版書目而已を掲げ御觀覽に供し御注文を仰ぐこととしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

泉鏡花著
鏑木清方畫

近刊 小誓之卷

定價七十錢
郵稅十錢

(上製總クロース美本)

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以て、天と地と人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也。

鈴木秋子女史著

再版 軍國の婦人

定價廿八錢 郵稅四錢

戦争の裏面に婦人あり戦争は男子のみにて
なすものと云ふものは未だ以て今日の時局
を語るべからず本書は實に婦人戦時に於て
なすべき活動の方法及び戦争と婦人との天
職を説きたるものにして事勢に適切なる事
は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力
むるものは必ず一讀せざるべからざるの書
也

基督教講壇集

定價七十錢 郵稅八錢

本書は眞に生命の麴麩靈活の根原たる現代
基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載
したる雑誌講壇の全部を合し改冊せしもの
なり居ながら各大家の口演を聴聞する好冊
子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛
讀の榮を給へ

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

新刊 日本名家手簡

定價金參拾錢 郵稅金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰
文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せん
と欲するもの先づ先輩の往復文を研めざる
べからず、是れ本書の出る所以なり本書收
むる所我國大家の模範文に附するに各其小
傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟
くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは
男女を論せず一讀せざるべからず

